

「集合的写真観察法」に基づく教育実践

後藤 範章

「社会調査士」制度の創設に伴って、質的調査の教育方法が問われるようになってきている。何をどのように教育したら良いのかが重要な課題と認識されるようになってきているのである。参考事例の一つとして、1994年度より私がゼミで行っている「集合的写真観察法」に基づく教育実践を取り上げる。“写真で語る：「東京」の社会学”と題するこのプロジェクトは、学生たちが、私たちが生きている社会、その中でうごめいている人間、現実の細部の中に宿っている「社会的な意味」や「人々の意図」をくみ取って、文字通り動詞型の「社会学すること (Doing Sociology)」に内発的・積極的に取り組める方法（新しいビジュアル・リサーチ・メソッド）として、開発し実践しているものである。「集合的写真観察法」は、個々の写真に写り込んでいる集合意識や集合現象をくみ取り、様々な実証データを収集して、社会的に分析することを目指している。同時に、それら1つ1つの諸断片が相互に関連性を持って「ある種の物語」が紡ぎだされていくことをも想定している。小作品「群」が全体として1つの作品として自立し、モノグラフに相応しい内実を獲得していくところに、「オムニバスとしての『東京の社会学』」が構想される。「集合的写真観察法」によって、学生たちは「東京」と「東京人」に対するセンス・オブ・ワンダーとソシオロジカル・イマジネーションを質的に高め、見え隠れしていた社会のプロセスと構造を可視化し可知化していくのである。

1. はじめに

— 社会調査士制度の創設と 社会調査教育 —

1.1. 日本の社会調査と社会学の未来を 切り開いていく力

ご紹介いただきました日本大学文理学部社会学科の後藤です。わが国における社会調査のデータベース／アーカイブの先駆けであるSORDを構築・公開・運営され、社会調査の研究と教育に大きな力を注いでおられる札幌学院大学でお話しする機会を与えていただき

ましたことを、大変光栄に思います。

1年ほど前に東京都立大学（現首都大学東京）の玉野和志さんから『社会情報』の抜刷⁽¹⁾を送っていただいたことを思い出しまして、ここへ来る直前に目を通して参りました。一昨年のこの研究会で玉野さんがお話しされたことをまとめられたものだと思うのですが、「日本の社会調査と社会学の未来を切り開いていく力」といったことに言及され、国立大学ではなく私立大学こそが社会調査を引っ張っていくべきと主張されておられました。共感を抱くと同時に、この点を多少なりとも

Goro Noriaki 日本大学文理学部教授

意識しながら話を展開したいと考えております。

1.2. できたての報告書

札幌学院大学も社会調査士制度に参加されておりますが、私どもの学科でも2004年3月の卒業生から数名ですが社会調査士の資格取得者が出る見通しです。お手元に『マスコミの世論調査の方法・現状・課題』と題した小冊子⁽²⁾を配らせていただきました。私たちの学科では、1年生を対象に「社会調査の方法」を通年で教えています。2004年度から施行される新カリキュラムでは、これを半期科目に切り分けて「社会調査入門」と「データ収集・分析法入門」にすることにしておりますが、社会調査士制度のスタートに合わせて、1年生の学生達に刺激を与えたいということで、昨年(2003年)の6月になるのですが、朝日新聞社の世論調査部とNHK放送文化研究所の世論調査部からお二方を招いて、「マスコミによる世論調査の方法・現状・成果——朝日新聞とNHK——」と題する特別講演並びに討論会を開催致しました。その報告書がこの2月にできたばかりの、今見ていただいているものです。これについては詳しくお話しませんが、受験偏差値の高低に関わらず学生達は決して小さくないポテンシャルを有していて、教育上の働きかけや刺激の与え方如何で十分に伸びていく可能性を誰しもが持っている。そんな学生観に従って、このようなことをやってみたということでご紹介させていただきます。

1.3. 社会調査士資格認定機構の科目認定と 選択科目の開講状況

レジュメに掲げた表をご覧ください。日本社

会学会・日本行動計量学会・日本教育社会学会が2003年11月に設立した「社会調査士資格認定機構」の理事を務めておりますが、科目認定の作業にも関わっておりまして、そこで得られた情報をまとめてみたものです。

ご存知の通り、社会調査士を取得するための標準カリキュラムとして7科目が用意され、そのうちのEとFの2科目に関してはいずれかを選択すれば良いことになっております。Eは初等の多変量解析を扱う科目、Fは質的調査を扱う科目です。2003年度分は45機関から科目申請がなされましたが、そのうちE科目を開講しているところが34機関・全体の75.6%、F科目はわずか19機関・42.2%に留まっております。これが、2004年度、つまり来年度の開講科目の申請状況を見ますと(第1期分のみ)、37大学のうち、E科目が35機関・94.6%で19%割合を上げています。F科目については24機関・64.9%で、前年度と比べると約23%近くも増加しました。大きな流れとして、これまでは社会調査という量的な調査を真っ先に思い浮かべることが一般的でしたが、社会調査士制度の創設に伴って、質的調査の役割といいますかポジションが変わりつつあることを予感させるデータではないかと思うわけです。

本日、札幌学院が有末さんと私を呼んで下さって「質的調査の教育実践」というテーマで研究会が開催されるということも、質的調査をどのように教育していったらいいのか、あるいは学生に実際にどのように企画・設計させ実施に移していったらいいのかということが、今まで以上に重要な課題と認識されるようになってきている証左であると考えられるように思います。そこで、参考事例の一つとして、私のゼミプロジェクトについてこれから

	E科目(多変量解析)開講	F科目(質的分析法)開講
2003年度開講科目:申請機関数 45	34機関(75.6%)	19機関(42.2%)
2004年度開講科目:申請機関数 37	35機関(94.6%)	24機関(64.9%)

詳しくお話しさせていただこうと思うわけです。

2. “写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクト

2.1. 調査票調査に基づく社会調査実習の困難性

これは、私が1994年度、今から丁度10年前からゼミで取り組んでいるものなのですが、何故こうしたことを行うようになったのか。その背景の一つとして、それまで行っていた調査票調査に基づく社会調査実習の困難性を強く認識するようになったことを指摘しておきます。社会調査実習という科目が用意され、調査票を使って標準化された調査を一通り経験することで授業を展開する大学が圧倒的に多いだろうと思います。学生たちが、問題意識を深めそれに見合ったテーマを設定して、量的調査（調査票調査）を企画・設計し、サンプリングや実査（現地調査）を行い、エディティング、コーディング、データのコンピュータへのインプット、集計・分析、そして調査報告書の刊行といった一連のプロセスを、一年間できちんとこなしていくのは実は困難極まりない。

私が経験してきた範囲で言えば、学生たちの自主性・主体性を尊重するスタンスをとると、調査の企画・設計段階で足踏み状態が続き、サンプリングを実施するのが秋口かそれ以降になってしまいがちです。こうなると、調査結果を多面的に検討して報告書や論文にまとめていくことなど、年度内にはとても期待できなくなります。他方、調査の全プロセスを学生に効率よく「実習」させることを第一に考えると、とかく時間のかかる調査の企画・設計と調査票の作成作業を実質的に教員がやっけてしまい（せいぜい学生の意向を一部採り入れる程度にして）、学生が全面的に関わるのは実査とデータの整理・集計・分析段階に留まってしまう傾向が強くなります。この

場合は、“研究”に有用なデータを収集・分析する本格（学術）的な調査経験を味わえるといった利点もありますが、学生がややもするとロボット的な存在になりかねません。とりわけ調査票調査の場合、集計結果が出ないと成果を肌身で捉えることができにくいので、体の良い無償アルバイトになってしまう危険性がついて回ることになります。

私自身、そうした経験を重ねる中で、学生一人一人が自らの生活世界や身体を介して社会的リアリティに迫り、なおかつ社会学の面白さや奥深さを“体感”できるような「実習」が、今述べたような調査実習とは違った形式と内容でできないものかと思い悩んでおりました。学生が調査票調査の実習経験を積むことは必要であり、社会調査教育の最も重要な柱であることは確かですが、それとは別に、私たちが生きている社会、その中でうごめいている人間、現実の細部の中に宿っている「社会的な意味」や「人々の意図」をくみ取って、文字通り動詞型の「社会学すること（Doing Sociology）」に学生たちが内発的・積極的に取り組める新しい方法の開発・実践が急務である、と思われたのです。

“写真で語る：「東京」の社会学”は、こうしたことを背景の一つとして産み落とされた「社会学の教育・実習プログラム」なのです。

2.2. 新たなプログラムの構想・開発と実践の積み重ね

1994年度から私は、本務校や非常勤校での担当科目の開講時に、「センス・オブ・ワンダー」（R. L. Carson）と「ソシオロジカル・イマジネーション」（C. W. Mills）の重要性⁽³⁾に言及して「社会観察のすすめ」を説いております。私たちの身の回りに引き起こされている様々な社会現象を観察して「不思議」を発見したのなら、内発的な好奇心とあれこれ調べてみたいという知的欲求が膨んでくる。対象となった事象にアプローチして、個別具

体的な私的問題と社会構造に関わる公的・社会的問題とを関連づける、つまりソシオロジカル・イマジネーションを働かせることで、Doing Sociologyの面白さと奥深さを体感できるはずだ、と説くわけです。

その上で私は、受講生に次のようなレポート課題を課します。共通テーマは「写真で語る：『東京』の社会学」。観察の対象は「東京」（一定の地域的な範域性＝空間的・社会的な完結性・全体性を有した一つの都市社会を想定しているのでは必ずしもなく、現代都市あるいは現代社会にまで一般化して捉えることも可能です）と「東京人」（同様に「都会人」や「現代人」にまで広げられます）に据えられます。受講生に求める実際の作業は、今日の「東京」や「東京人」のあり様を先鋭的・象徴的に表象すると考える場面を視覚的に捉え（一枚の写真に収め）てデータ化し、適切なタイトルを掲げると共に、社会学的な言説で400字程度の解説を加えてみる（社会学的に分析する）、というごくごく簡単なものです。

学生たちは、「東京」あるいは「東京人」の特徴が表わされていると判断した場面を写真に写し取りますが、その対象となった社会事象に向けている〈まなざし〉の奥には、その学生自身の「東京」認識／現実認識が隠されています。従って、ある一断面を写真に収めるという行為は、その当人の「東京」認識をあぶり出すことにつながっていきます。その点を意識して、なぜその場面を写真に撮ったのか、そしてそこにどういう点で「東京」や「東京人」の特徴（東京性／東京人性）を見いだしているのかを、自らとの〈対話〉を通して解説文としてまとめあげることで、レポートは出来上がっていきます。

この課題は数ヶ月間かけて取り組まれ、夏休み前に提出されます。他方、私のゼミでも「東京」に関する学習と議論を積み重ね、ゼミ生が各自テーマを設定してそれに沿った写真を撮り、講義の受講生と同様に作品化します。

こうして毎年200本から多い年で500本ものレポートが上がってきますが、これらはそのまま「東京における多元的なリアリティが刻印された質的データ群」を構成するので、「東京」の社会学的研究の格好な素材となり得ます。そこで数100本のレポートがゼミに引き渡たされ、毎年夏休み中にゼミ合宿を実施します。合宿では、「各人のまなざしが結晶化した一枚の写真は、どれほど鮮やかに『東京』や『東京人』の諸相を描き出し、そこにいかにほどの社会学的な知を織り込むことができるのか」という観点から、徹底的な討議を経て約30点の作品（写真）が選考されます。その後ゼミ生たちは、原作者の意図や解釈にとらわれずに、各作品を「社会学の眼（視点・方法・理論）」で改めて読み解き、タイトルや解説文に手を加えた新しい作品群に仕上げている。成果を学内で展示発表する⁽⁴⁾と共に、ウェブサイト⁽⁵⁾でも公開することにしています。

このようなプロセスを経て、1994年度以降これまでに公表された作品は約300点となっております。なお、この課題にはこれまで、本務校の日本大学文理学部社会学科及び大学院文学研究科社会学専攻以外に、非常勤講師として出講した法政大学社会学部及び大学院社会学研究科、立正大学文学部社会学科、慶應義塾大学法学部政治学科の学生・院生が取り組んでいることを付言しておきます。

3. 既発表作品の紹介

このプロジェクトによって、実際にどのような作品が生み出されているかを知っていただくために、過去作品の中から20点を選んで紹介致します。このうち、16～20の5点は、写真を複数点用いた作品となっております。（注 写真と解説文は12のみ本稿末尾に掲載。紙幅の関係で他の作品の発表年・番号・作品はタイトルのみを掲載。注5のウェブサイトまたは注6の後藤論文をご参照いただき

たい。)

1. 1994年 No.1 イリンクスとしてのキャッチボール—カイヨワ流‘遊びの社会学’—
2. 1995年 No.11 さくらやのさくら—東京パフォーマンス劇場—
3. 1995年 No.30 人間定規—恋人達の無言のルール—
4. 1996年 No.17 座りたいのに座れない—ひとときの安らぎを奪われた空間—
5. 1996年 No.24 「見ること」と「見られること」—まなざしの相互作用—
6. 1998年 No.4 「公共性」と「私性」との折り合い—携帯電話のアイロニー—
7. 1998年 No.25 気がつけば中吊り—視線の誘導—
8. 1999年 No.11 第四の生活空間—遠距離通勤者の電車生活—
9. 1999年 No.27 Please wait to open the door.—工事現場も原宿中!—
10. 2001年 No.10 私的空間の集合体—電波の圏内, 意識は公共圏外—
11. 2001年 No.26 若奥様の行列—学校歴にもブランド信仰—
12. 2002年 No.12 東京型通学スタイル—私も“越境”通学生!?!—
13. 2003年 No.13 神様の不透明化—明治神宮と明治天皇の関係性—
14. 2003年 No.15 お台場温泉物語—都心型温泉の誕生—
15. 2003年 No.30 対向するまなざし—浜離宮と汐留との「借景」関係—
16. 1998年 No.23 東京のワールドカップ—圧倒的なボリュームとビッグマックな現象—
17. 1999年 No.12 何故行列ができるのか?—後藤ゼミ’98年新宿・渋谷調査から—
18. 2002年 No.25 場外馬券場の2タイプ—どっちがWins?—
19. 2002年 No.30 「東京」のワールドカップ

—日本のセンター・フォワード—

20. 2003年 No.28 財布の紐を握られたロップンジン—大量集客・大量消費を促す蜘蛛の糸—

4. 写真を使った都市社会調査

4.1. 「写真で語る」ことの意味

ここまでで与えられた1時間のうち35分も使ってしまいましたので、ここは簡潔にしたいと思います。「写真で語ることの意味」ですが、レジユメにはベンヤミン、ブルデュー、ベッカー、西村清和、飯沢耕太郎などといった人たちの写真論を整理してありますが、私は、写真が「無意識が織り込まれた空間」「都市の無意識の標本断片」であるという点を特に注視しております。写真には、写真家の意図しないことが自動的に写りこんでいて、従ってその中からどの物語素に注目するかによって様々に物語る事が可能となる。写真はそうした特性を持ったメディアであり、なおかつ「社会の探索のためのツール」にもなるし、「集合的心理の標識」にもなる。さらには「歴史や社会構造、社会プロセスがありありと写り込む」こともある。そうした写真を活用することで、「都市社会調査」が成り立つのではないかと考えるわけです。

4.2. まなざしの結晶化と解釈の相互作用

—不可視性(見えにくい社会のプロセスと構造)の可視化と可知化—

この部分につきましても、以前『日本都市社会学会年報』⁽⁷⁾でも詳しく述べていますので、簡単に済ませます。まずレジユメにある1点目のレポート提出者の状況に定義づけとゼミ生の状況の定義づけに関してです。これは元々の原作者が写真をどう読み込むかから離れて、ゼミ生が自由な観点で様々に読み込む。先程言いました様に、写真に写りこんでいるどの物語素に注目するかによって物語が変わってくる。従って、当然のことながら「状

況の定義づけ」も変わることにあります。この定義づけから作品化がスタートするということです。次に、教員の「社会的介入」と書いてありますが、これはゼミの場で発生する集団力学の効果を可能な限り小さくするための方途となります。例えば、有力なゼミ生が示した意見にフォロアーの学生達が引きずられてしまう傾向が出てくる。そこで私は、どんな集団力学がどんな集団構造に支えられて生じることになるのかを押さえ、そうした力学の効果が作用せずに、より多角的・多面的に写真を解釈するように働きかけを行うことで、ある種のバイアスがかかることをできるだけ小さく押さえ込むことを教師の立場として行うということです。次に、「凝視と対話——せめぎ合いと紡ぎ合いのダイナミズム——」ですが、写真に写りこんでいる社会事象をしっかりとまなざす、そしてそれを基にゼミ生間あるいは教員を含めて「対話」を重ねていく。原作者のまなざしとゼミの学生1人1人のまなざしと教師（私）のまなざしとがぶつかりあって展開するドラマティックな相互作用を徹底的に重ねることで、「せめぎ合いとつむぎ合いのダイナミズム」が引き起こされる。学生のもっている力に信頼を置くということにつながると思うのですが、このメカニズムの最大化を図れるかどうかは実は作品の質にも反映してくることになります。

「社会をのぞき込む窓——『東京』認識／経験の表象としてのフォトグラフィー——」ですが、撮影し使う写真を「東京」と「東京人」が写りこんでいるものとしています。ここでいう「東京」とは地理学的ないし行政的に区切られた東京ではなくて、ある種の「東京らしさ」「東京性」というものが読み取ればどんな写真でも良い。沖縄で撮っても新潟で撮っても札幌で撮っても、そこに「東京性」が読み取れるものであれば分析の対象にする。そういう意味での「東京」認識や経験が表象されるものとして写真を捉えている、と

いうことです。

「東京写真」を集团的に解釈して作品化する過程には、学生たちが「東京」や「東京人」に対する感性／感能力（冒頭に述べたセンス・オブ・ワンダーにつながると思うのですが）、そうした「感覚の主体性」を研ぎ澄まし、「社会認識のための想像力」（これもソシオロジカル・イマジネーションにつながると思います）を質的に高めていく過程が、紛れもなく含まれています。このことによって、社会的リアリティを嗅ぎ取り、読み込み、共通の言葉を紡いでいくことによって、諸事象の背後に隠れて見えなかった社会のプロセスや構造が可視化／可知化されていくのです。この点が、私たちのプロジェクトが紛れもなく Doing Sociology の実践的な試みとして位置づけることが可能であると考えられる理由となります。

4.3. 方法論的転回——実証性の高まり——

この10年間の積み重ねの中で、方法論上、質的に大きな転換を経験しました。研究対象との距離の取り方に大変化が起こったのですが、一口に言うと、ダイレクト・オブザベーション（直接観察／非参与観察）からトライアンギュレーション（マルティプル・メソッド）への方法的な転換、と言って良いでしょう。

最初の段階では、写真に写り込んでいる事象を外側から「まなざす」こと（ダイレクト・オブザベーション）によって解釈・分析が成り立っていました。いつどこで撮った写真なのかについても特に関心を払いませんでした。ゼミ生たちが各自持っている「引き出し」から何が引き出されてくるかによって、議論に方向性が与えられました。「社会学すること」の中身も、既知の社会的な諸概念を、対象となる事象にどう当てはめるかに留まっておりました。

転機は、プロジェクト3年目（1996年度）

が終わる時に訪れました。あるゼミ生から、「現場に立ち降りて原作者が切り取ってきた場面を、写真に現れていない背景を含めて検証する作業、フィールドワークが決定的に不足している。そのために実証性が低いままになっている」という根底的な批判がなされたのです。リアリティへの感応力と想像力の質的転換に伴って不可視性が可視化・可知化していただくだけでは、実証研究とは言えない。「東京の社会学」にもならない。私たちは、原作者がその写真を、どういう意図や意味を込めて、どこで撮影し解説文を作ったかにもこだわった方がよい。原作者の意図を離れて捉え直す場合も、写真の中に写り込んでいる現実そのものに身を置いて、検証し直してみることが不可欠である、と。

こうした「批判と反省」が、転換の契機を与えました。1997年からは、「場面の再現性」と「関係者の主観的意味の理解」が強く意識されるようになりました。ゼミ生たちは、写真に写っている状況を兼ね備えている場面に必ず入り込むようになりました。該当する事象に関係性を有する人々にインタビューし、その事象にどのような思いや意味が込められているのかを把握するようにもなりました。インテンシブな観察やインタビューだけではなく、関連する統計データなどの既存資料の収集と分析、先行する研究成果のフォロー、量的調査の実施といったマルチプルなメソッドが「グループワーク」として採られるようになり、ここ数年来、フィールドワークに費やす時間とエネルギーが飛躍的に増大しています。その結果、解説文には必ずしも現れないのですが、作品一点毎に膨大なバックデータが蓄積されるようになりました。「視点と技法の重層」(質的データ分析と量的データ分析との立体的な結合)と「分析結果の総合」とが果たされる道筋が、はっきりと示されるようになったのです。

“写真で語る：「東京」の社会学” プロジェ

クトは、こうして方法論的な転換と洗練を経験しました。私は、ここで採られる方法を、新しい都市社会調査法の一つと積極的に位置づけ、「集合的写真観察法」と呼称するようにもなりました。学会や研究会での口頭発表や講演、論文なども、蓄積度が高まっています。こうして、社会学の教育・実習プログラムとしての従来の側面に加えて、都市社会調査論の文脈にのせて検討できる段階に至ったのです。

5. 集合的写真観察法——新しいビジュアル・リサーチ・メソッド——

「集合的写真観察法」というネーミングに関しては、松平誠さんがかつて都市祭礼集団の研究で採用した「集団的参与観察法」からヒントを得ています。松平さんは、まず量的な調査を予備調査として実施・分析します。その上で、キーパーソンを含む複数の個人に関するライフヒストリーをゼミ生たちが体系だてて聞き取ります。一人の研究者が一人のインフォーマントからライフヒストリーを聞くという方法では、解釈の恣意性が高く、一般化の妥当性が低いという難点がついて回るといことで、松平さんはデータの均質性を保証するための方法として、集団による参与観察と聴き取りを行うわけです。学生たちが得たデータを相互に反証したり補強することで均質性と信頼性が獲得されていくと考え、松平さんはそうした方法として「集団的参与観察法」を提唱・実践したのです。

この方法は、N. K. Denzin の言う「トライアンギュレーション」にも通じるだろうと思います。これは、少なくとも3つ、望ましくはそれ以上のマルチプルなメソッドを用いて異なった視点と異なった知見を結合させ、真相を明らかにする方法ですが、彼は、a) Data Triangulation, b) Investigator Triangulation, c) Theory Triangulation, d) Methodological Triangulation の4種類の

トライアングレーションを提示しています。a) は研究において種々のデータの情報源を使うこと、b) は別々の異なった調査者もしくは評価者を使うこと、c) は単一のデータセットを解釈/説明するためにマルチプルなパースペクティブを使うこと、d) は単一の課題を研究するためにマルチプルなメソッドを使うことを、それぞれ意味します。データの収集と分析にあたっては、質的/量的データを問わず、また質的/量的分析をも問わずに、使えるデータや方法は何でも使うという姿勢に彩られています。

「集合的写真観察法」は、こうした松平さんや Denzin に基本線で依拠する面が大きいのですが、「集合性の獲得」と「写真」を用いるという点で独自な方法と見なすことが可能でしょう。それは、写真というイメージ・データを用いて、集団で（集合的に）社会事象を観察することによって、社会を読み解く方法と言えます。これまでの議論を整理して、特徴点を示しておきましょう。

- ① 多元的なリアリティがそれぞれに刻印された都市写真が用いられる。それらは、ビジュアルで質的な「集合」データを構成する。
- ② 写真に写り込んでいる「集合」意識や「集合」現象をくみ取って、社会的に分析することが目指される。様々な実証データが収集・分析され、見え隠れしていた「社会」のプロセスや構造の可視化・可知化が計られる。
- ③ 観察者たちの間で展開するドラマティックな相互作用を介しての作品化プロセスで、共同主観性（間主観性）が形成される。相互作用を経て一人一人の認識作用が融合することで、「集合」的な解釈枠組みや解釈が織りなされていく。これは、観察者たちの社会的リアリティへの感応力（センス・オブ・ワンダー）とソシオロジカル・イマジネーションが質的に転換する過程でもあ

る。

- ④ 方法の信頼性は、主に「場面の再現性」と「関係者の主観的意味の理解」によって補強される。また、視点と技法の重層と分析結果の総合が、集団的・集合的な作業として行われることで（4種類のトライアングレーションによって）、信頼性が担保される。
- ⑤ 解釈の妥当性は、マルチメソッド・アプローチによるデータの収集・分析の成果によって、別個に検証（テスト）される。また、教師による「社会的介入」を受けながら形成されるゼミの共同主観性（集合性）が、妥当性を担保する。

こうした何重かの「集合性」の獲得が、データの均質性や一般化の妥当性を高めることにつながります。「集合的写真観察法」を新しいビジュアル・リサーチ・メソッド、ないしマルチメソッド・アプローチの一変種と位置づける理由が、ここにあるわけです。

6. オムニバスとしての「東京の社会学」—— もう一つの集合性 ——

6.1. 「東京」と「東京人」のモンタージュ

個々の作品は、それ自体が独立したモノグラフになり得ます。「集合的写真観察法」は従って、第一義的には、個々の写真から「集合意識」や「集合現象」を見だし、社会的に分析するための方法でした。

しかしながら私は、それら1つ1つの諸断片が相互に関連性を持って「ある種の物語」が紡ぎだされていくことをも想定しています。それらの小作品「群」が全体として1つの作品として自立し、モノグラフに相応しい内実を獲得する手応えを感じているからです。ここから私は、多数の小作品群からなる「オムニバスとしての『東京の社会学』」を構想します。個々の作品がそれぞれに一つの完結した物語を構成すると同時に、それらが互いに引き寄せ合う結果、全体としても一つの

作品として自立し、「東京」と「東京人」をモニタージュする。これは、「せめぎ合いと紡ぎ合いのダイナミズム」によって、もう一つの「集合性」が獲得される道筋、と言っても良いでしょう。

現時点で「構成」がある程度出来上がり「モニタージュ」されているものは、以下の通りです。

- 【1】 移動性（非土着性）と流動性と超域性
—「東京」の超広域化—
- 【2】 グローバリゼーションと人種的異質性
—世界都市「東京」—
- 【3】 コミュニケーションの間接性と断片性
—サイバースペース「東京」—
- 【4】 まなごしの交差と非交差 — 自由・好奇心・無関心 —
- 【5】 都会人の生活作法 — 無言の流儀と同調圧力 —
- 【6】 人を動かす社会的装置 — “仕掛け” としての新奇さ・お洒落・流行り・景観・欲望・熱狂 —
- 【7】 舞台としての「東京」（マイ・ライフ、マイ・ワールド）— 自分探しと自己変革、そして癒し —
- 【8】 大都市のエア・ポケット — 視界に入りにくい社会的現実 —
- 【9】 行政の作為と不作為 — 計画の落とし穴 —
- 【10】 超多面体都市「東京」— それぞれの街・スポット・人間模様 —

6.2. 丸の内 — 【10】 の一事例として —

詳しく述べる余裕はもはやありませんので、一例だけを示すことにします。以下は、地域別のシリーズと言っても良い【10】 超多面体都市「東京」のごくごく一部、「丸の内」を扱った作品群です。1995年度と1999年度と2001年度のもの各1点、2002年度が2点の合計5点から構成されるオムニバスです。

（注 紙幅の関係で作品の発表年・番号・作品

タイトルのみを掲載し、写真と解説文は全て省略する。注5のウェブサイトまたは注6の後藤論文をご参照いただきたい。）

- 21. 1995年 No.24 人も街も骨休め!? — 日曜日の丸の内オフィス街 —
- 22. 1999年 No.9 地下鉄交差点 — 日本株式会社の中核部 —
- 23. 2001年 No.17 皇居前の空間再構築 — ここにも規制緩和の波? —
- 24. 2002年 No.3 ‘ハレ食’ と ‘ケ食’ — 丸の内の昼食事情 —
- 25. 2002年 No.11 光の共鳴 — 変わらぬシンボルと進む再開発 —

これらによって、果たしてどのような像がモニタージュされるでしょう？

- 1) 皇居（宮城、かつての政治的・社会的な権力中枢です）とその正面に位置する東京駅（天皇が乗降する日本の中央駅です）、両者を結ぶ大通り（天皇が皇居から東京駅へ向かう「行幸」通りです）と通りの両脇に位置する丸の内地区（国家権力と三菱財閥とが官民をあげて開発したビジネスセンター＝経済中枢です）とが、密接不可分に一体化しているということ。
- 2) これが、東京全体の空間構造の最も中心的な核（センター・コア）となり、それを「神聖」を崇める価値意識の構造が支えてきたということ。
- 3) 東京の都心部の駅で駅舎の外観を隅々まで見渡せるのは、東京駅や明治神宮のある原宿駅くらいしかない。これも皇居ないし天皇制との関係を抜きにしては考えられないということ。
- 4) 近年になって、今お話ししたような空間構造と価値構造との完全一体的な重なり合いが少しずつ薄れてきた（呪縛からの解放）。その結果、空間規制が緩むようになり、超高層ビルの建設ラッシュが始まるようになっていくということ。
- 5) 平日だけ、大企業のビジネス・エリート

によって占有された静寂な皇居前の空間（丸の内・大手町）が、2002年の丸ビルのオープンなどによって多くの人々を広範囲から引き寄せるようになり、週末にもぎわう繁華街に変質しつつあるということ。

6) にもかかわらず、皇居から東京駅へかけての空間には、新宿や渋谷、池袋のような世俗的な大衆性とは明らかに異質な空気が色濃く漂っているということ。

たった5点のオムニバスでありながら、以上のような諸点が視覚（皮膚感覚）を通して立体的に伝わり、なおかつ説明力が相当あると受け止めていただけるものと思います。

このようにテーマ別・地域別に作品を縦横無尽につなぎ合わせることで、「東京」や「東京人」の社会・生活構造や意識のあり方、変動のプロセスなどといった見えにくいもの（不可視性）を可視化／可知化する道が確実に開かれる。そんな手応えを、私自身は強く感じているのです。

7. おわりに

—— 社会調査の新動向 ——

持ち時間の1時間が過ぎてしまいました。この後に有末さんのお話が控えておりますし、質疑応答の時間も確保しないといけませんので、最後に以下の点を簡潔に述べて終わりにしたいと思います。

私が2002年12月に発表した論文⁸⁾の中で、英語圏における近年の注目すべき社会調査の諸動向として、次の7点を指摘し、詳細に検討を加えました。

- 1) Grounded Theory Methodology/Methodsの着実な展開と定着
- 2) 質的方法と量的方法との優劣論争の大幅な後退
- 3) 単一の調査技法に依拠することからの脱却志向の高まり
- 4) 質的調査法への再／新評価のより一層の高まり

5) 質的データ分析とTheory Buildingへのコンピュータ・アシストの発達と洗練化

6) 社会調査（量的／質的）データ・アーカイブの整備とSecondary Analysisの活性化

7) Visual Sociology（視覚社会学）のOne Branch of Sociologyとしての確立とVisual Research Methodsの普及

実は、「集会的写真観察法」の提唱と実践はこれらの動きと決して無縁ではなく、むしろある面で強く意識したり、響き合ったりもするのです。微かなうごめきが、ハッキリした容貌を持って立ち現れるようになってきたのです。この点を指摘すると共に、レジユメの最後に記しましたように、今日の私のお話しは、近々出版される予定の本のために執筆し提出済みの「都市を観る、都市を読む」と題する論文（注6）を下敷きにしておりますので、それも合わせてご参照頂ければ幸いです。

足りない部分や不明点・疑問点などにつきましては質疑応答の時間に委ねるとして、ひとまず私のお話しはここまでにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

注

- (1) 玉野和志「日本におけるサーベイ調査の導入とデータ管理の現状」（『社会情報』第12巻1号、札幌学院大学社会情報学部、2003年2月）
- (2) 後藤範章編『マスコミの世論調査の方法・現状・課題——特別講演・討論会の記録——』（日本大学文理学部社会学科・後藤研究室、2004年2月）
- (3) 社会調査を企てる上でのセンス・オブ・ワンダーとソシオロジカル・イマジネーションの重要性に関しては、差し当たり、大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・永野武編著『社会調査へのアプローチ——論理と方法——[第二版]』（ミネルヴァ書房、2005年2月）を参照されたい。
- (4) 1994年度～2004年度の11年間は毎年10月

終わり～11月初め頃に開催される学部祭の場で展示発表してきたが、2005年度からは「東京」を観る、「東京」を読む。>>Dialogue between Sociology and 'Visuals' <<"展と題する学部主催の展覧会に生まれ変わる。日本における"Visual Research Methods"ないし"Visual Sociology"の定着・発展を意識しつつ、写真家、映画監督、画家、建築家、フォトジャーナリスト、アニメーター、映像作家、工芸作家、スタイリスト、デザイナー、絵本作家、都市計画家などといった、Visualに関連する多種多様な異分野の専門家にも毎年1人ないし1団体に参画してもらって私のゼミとのジョイント展を開催すると共に、講演会(対論)も実施する。第1回は、2005年11月22日(火)～12月1日(木)の10日間にわたって、日本大学文理学部百周年記念館のエントランスホールにて開催の予定である。詳細に関しては、注5のウェブを参照されたい。

- (5) 「東京人」観察学会(日本大学文理学部社会学科・後藤ゼミ)のWebサイト。URL http://www.chs.nihon-u.ac.jp/soc_dpt/ngotoh/tokyo/
- (6) 後藤範章「都市を観る、都市を読む——写真で語る：『東京』の社会学——」(現代伝承論研

究会編『現代都市伝承論』岩田書院、2005年10月)

- (7) 後藤範章「マルチメソッドとダイレクト・オブザベーション——リアリティへの感応力——」(『日本都市社会学会年報』第14号、日本都市社会学会、1996年7月)
- (8) 後藤範章「社会調査の研究と教育をめぐる近年の諸動向——英語圏(特に英国)と日本を中心として——」(『社会学論叢』第145号、日本大学社会学会、2002年11月)

<付記>

本稿は、2004年3月15日(月)12:30～17:00に札幌学院大学G館5Fの特別会議室にて開催された札幌学院大学社会情報学部「第18回社会情報調査の方法に関する研究会：質的調査の教育実践」における講演記録(札幌学院大学がテープ起こしして下さった)をもとに、私自身の判断で合計25点の作品紹介部分の大幅な(写真と解説文の全ての)省略並びに若干の加筆修正を施したものである。(2005年9月12日記)

(日本大学文理学部社会学科教授)

E-mail: ngotoh@chs.nihon-u.ac.jp

<既発表作品より> 東京型通学スタイル——私も「越境」通学生! ? ——



ここは新宿、大ターミナルの夕方5時。制服に身をつつみ、背負ったランドセルからは通学定期券をぶら下げている少女。自分の住む市区町村外に「境界を越えて」通学する児童・生徒を「越境」通学生」と定義するなら、彼女もその1人に違いない。

2000年の国勢調査によれば、東京都内にある小・中学校への通学者807,915人の内、「越境」通学生は92,918人を数え、全体の11.5%にあたる。次に多い神奈川県は5.9%、全国平均に至っては1.8%。東京の数字の高さが浮き彫りになる。そして、「越境」通学生の大半は、全国852校のうち229校が集中する(2000年の『学校基本調査報告』による)都内私立小・中学校の児童・生徒なのだ。高まる私立志向、高度に発達した交通機関、それらに裏打ちされた越境への心理的障壁の低さ。こうした要素が、東京における「越境」通学生を実に10人に1人強の割合にまで高めさせている。

一見寂しげに見える彼女、しかしデータの向こう側から友達の姿が見えてくる。

写真：2002年7月5日(金)午後5時頃 京王線・新宿駅構内にて撮影

(c)「東京人」観察学会(日本大学文理学部社会学科・後藤ゼミ)